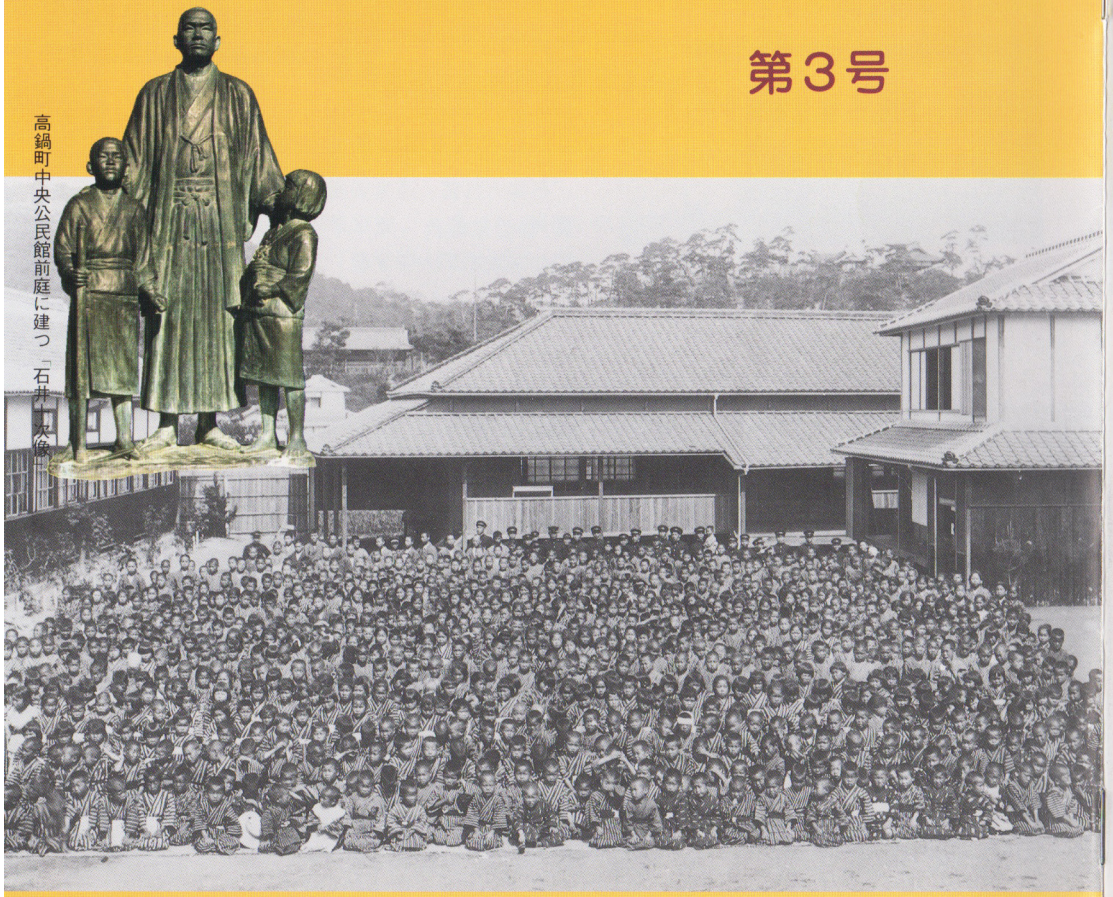
石井十次顕彰会だより

第３号



高鍋町中央公民館前庭に建つ「石井十次像」

財団法人　石井十次顕彰会

石井十次顕彰会の事業内容に「施設へ賛助金贈呈」という項目があり、今年も２施設へ贈られた。

日向市　大洋共同作業所

柿原理事より所長へ
賛助金が贈呈される。

佐土原町　佐土原通所福祉作業所

柿原理事より所長代理へ
賛助金が贈呈される。

募金者報告 第三号

平成四年十二月十九日～
平成五年十二月八日

篤志寄附

高鍋町　松尾正博様
〃　株式会社増田工務店様
〃　石丸恵守様
〃　立正佼成会高鍋教会様
〃　舘野キミ様
〃　皆川雅之様
〃　有限会社寿石油様
〃　守部左都夫様
〃　井崎俊博様
〃　東町公民館　八名様
〃　上町公民館　三十名様
〃　宮越公民館　五十二名様
〃　脇之内公民館　十二名様
〃　堀公民館　二十四名様
〃　上永谷公民館　三十六名様
〃　後小路公民館　一同様
宮崎市　黒木晩石様
〃　堀寛様
〃　株式会社橘ストアー様
〃　有限会社印刷センタークロダ様
〃　大迫三郎様
〃　中心の里様
日向市　永原友市様
東京都

忌明寄附

川南町　守田壱美様
高鍋町　長尾昭様

このたびは、多額のご寄付をいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

あとがき

平成五年は北海道沖の大地震に始まり、台風・冷害・不況と近年にない激動の年でした。平成六年度も厳しい年になることが予想されますが、「石井十次の精神」を糧にして素晴しい年にして下さい。ご意見ご指導よろしくお願いいたします。（編集子）

発行者：石井十次顕彰会
題　字：宮崎県知事　松形祐堯
印　刷：㈲印刷センタークロダ
発行日：平成６年１月３０日

石井十次顕彰会だより

第二回 石井十次賞

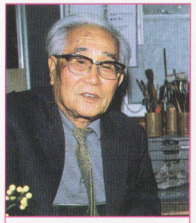
田村一二氏へ贈呈

平成五年四月十一日石井十次生誕記念式典当日に正賞「楯」と副賞が贈られた。

「石井十次賞」贈呈式
第２回石井十次賞贈呈式典が、高鍋町中央公民館に於いて盛大に行われた。

石井十次顕彰会理事長尾崎一男より、第２回受賞者・田村一二氏へ賞状・副賞が手渡された。

第２回の石井十次賞として、田村一二氏（茗荷村創設者）が満場一致で決定したことを報告される、「石井十次賞」選考委員長 福田垂穂氏（東洋英和女学院短期大学学長）



受賞者
田村一二氏

明治四二年京都府生まれ、八三歳。昭和八年、京都市滋野小学校で特別学級を担任されたのを契機に、精神薄弱児の教育一筋に歩み、戦前、精神薄弱児が社会からも顧みられず、教育からも放置されていた時代に、精神薄弱児の存在の意義を認め、その独自の世界を尊重する精神薄弱児観をうちたて、教育に専念されるかたわら、自らの実践記録を多くの著書によって、精神薄弱児養育の重要さについて広く啓蒙された。

戦時中苦難のなか、石山学園を創設。精神薄弱児の教育、福祉の統合的実践をすすめられた。その実践をもとにして、糸賀一雄氏、池田太郎氏と共に近江学園を創設。教育の原点に立って自ら指導にあたられた。

昭和三六年、年長精神薄弱者の職業指導を課題として「一麦寮」創設。寮長として施設経営に尽くされ、昭和五〇年、一麦寮を退職後は、氏の教育理念と福祉理念を根幹とした「茗荷村構想」をうちたて、

石井十次賞選考委員会 ― 東京都麹町会館にて ―

「石井十次賞」
正賞の楯
（石井十次のブロンズ像と茶臼原憲法）

慎重な中にも熱気あふるる審査風景

提唱され、人と人が、人と自然が調和、共存できる世界実現のために、「茗荷村運動」を展開してこられ、昭和五七年には、**滋賀県愛東町**の過疎地に「大萩茗荷村」を開村し、この運動は全国各地に広く共感者をつくりつつ、現在に至っている。

「大萩茗荷村」
10周年記念式典
のスナップ

顕彰意見発表

平成五年四月十一日の石井十次生誕記念式典にいて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。

高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各二校があり隔年毎に交代でおこなわれております。

高鍋西小学校
五年
黒岩　司

■勇気ある石井十次先生

一八六五年四月十一日、みんなに望まれてお生まれになられた十次先生。その後、いろいろな偉業を残し、四九歳でなくなられた先生に対するぼくの考えを今から発表します。

ぼくが初めて石井十次先生を知ったのは、小学校一年生の時です。その当時は、特になんとも思いませんでしたが、二年、三年、四年と、校門にある石井十次先生の像に毎朝、友達があいさつをしている姿を見たり、学校で学んだり、十次先生をしのぶ会に参加していくにつれてとてもすばらしい方だと思うようになりました。

四年生の時に学年で十次先生のビデオを見たり、生家を訪れたりして十次先生の事を調べました。その時、強く心を打たれた事が二つありました。

まず、一、二〇〇人ものかわいそうなこじたちを、いっしょうけんめい父親代わりとして育てられたということです。この時代は食べるのもやっとという貧しい世の中だったそうです。そんな時代にこじたちを育てることはとても大変な事だったと思います。

今、世界中では貧しさや、うえのためにが死する人がたくさんいます。もしここに、十次先生がいらっしゃれば、どんな行動をとられたか想像できます。きっとすぐにその国にかけつけ、うえに苦しむ人々に手をさしのべられたことでしょう。

次に、十次先生が医学の本を焼かれたことです。このまま医者になるか、それともこじたちを育てるかずいぶん迷われたそうです。もし、ぼくが十次先生の立場だったら、今まで医者になるために一生けん命勉強したのだから、医者の道を選ぶと思います。けれども、十次先生は、ちがいました。こじを育てる道を選ばれたのです。そして、今まで勉強していた医学の本を、こじ救済をしょうがいの仕事とする決意を固めるために、全部焼かれました。

十次先生はとてもやさしく、思いやりのある人だと思いました。自分の夢をすてることは十次先生もとてもつらかっただろうと思います。

ぼくは、十次先生の行動を考え、とてもすばらしい勇気のある行動だったと思います。

ぼく自身これからは、自分だけではなく、みんなのことを考え、十次先生のような、人を思いやる人になりたいと思います。そして同じ高鍋町で育った十次先生のことをほこりに思い、ずっとわすれないようにしたいと思っています。

高鍋西中学校生徒会代表
三年
松濱　稔

■石井十次先生から学ぶこと

僕達高鍋西中学校生徒は、石井十次先生生誕の地、文教の町高鍋町民として、毎日学習し、生活していることをとても誇りに思っています。

石井十次先生は心優しいそして心の強い人間だったと聞いています。歌にもあるように祭りの時、なわの帯をしめている友達に自分の帯をあたえ、自分がなわの帯をしめたという話を聞いたとき、僕はすごく、感動してしまいました。愛する母が仕事の合間に、一生けん命作ってくれた大切な帯を友達にあげるなど、とても僕には考えられないことだったからです。又、本格的に孤児救済をするため、医学書も焼いたと知りました。強い意思を持った石井十次先生だからこそできた岡山孤児院を初めとする、数々の功績ではないでしょうか。しかし、その背景にはさまざまな努力、苦しみがあったと聞いています。それは、今現在の裕福な社会、欲しい物はなんでも手に入る、この時代に生きる僕達にとって想像を絶するものだったのではないでしょうか。食料が底をついた時もあったと聞いています。しかしそれでも石井先生はくじけず、孤児と共に汗を流して働かれ、多くの人々を救ったと知りました。

病気がちな体にむち打って孤児につくした先生の歌がこうしるされてありました。

「孤児のため　命を捨てて働かん　永の眠りの床につくまで。」

すごいと思いました。孤児に父とよばれ、父としたわれた石井先生こそ、まさしく「孤児の父」の名にふさわしい偉大な人物だと思いました。

明治四四年七月二六日の石井先生の日記に

「理想の国とは、私心私欲なき、私有財産なき、鍬鎌主義をもって労働する神様中心の国。」と、記されてあり、僕はそこで目が止ってしまいました。それはすべて石井先生にあてはまる事だったからです。そして一つ一つ考えました。

「私心私欲なき国」は、時にはがまんも必要だというしんぼう強さを教え、「私有財産なき国」は自分の事ばかり考えてはならない。ということを教えていると思います。

「鍬鎌主義をもって労働する国」とは、毎日汗を流してみんなのために働きなさいと言うことであって、「神様中心の国」とは、神を敬いなさいと言うことだと思います。これら、石井十次先生の理想の意は、我々の学校、又大きくいえば、日本の社会生活においてとても重要なことではないでしょうか。そして特に、自分のことばかり考えてはならないということは、人間として、必ず心の奥底に留めておかなければならないことだと思います。

石井十次先生からは、たくさんの学ぶべき事があると思います。僕達も偉大な人物が生誕した、高鍋町の町民として、それを世界中に誇りに思い、その精神を引き継ぎ、少しでも学びとり、実行していく努力をすることを誓いたいと思います。

宮崎県立高鍋高等学校
普通科三年
山下　智

■石井十次について

〝天地は一体なり　一人本気になれば
　おのずからその響き　世界に広がらん〟

これは、大正三年一月三〇日、石井十次先生が亡くなられる直前に残された言葉です。

私の学校では、この言葉について、校長先生が全校集会で話されたことがあります。その内容を一部紹介したいと思います。文のはじめに〝一人本気になれば……〟とありますが、これは、〝一人だけ〟が本気になるのではなく、〝一人一人〟が本気になればということだそうです。私は、「なるほど」と思いました。

私の学校には、正門横に〝帰国途上の所感の碑〟が建てられています。また、中庭には、〝精米所跡〟があり、石井十次先生が孤児達と農作業に精を出していた様子がうかがわれます。私は、石井十次先生の精神をうけついでいるこの由緒ある学び舎で、学校生活を送ることができることを大変誇りに思います。『石井のお父さん!!』と呼ばれ、子供達に親しまれた石井十次先生は、様々な挫折を繰り返し、二四歳にして〝孤児救済〟という天職に目覚めました。また、「日清、日露戦争」「濃尾大地震」「東北大飢饉」など、数々にわたる出来事で親を亡くした孤児達に、石井十次先生は救いの手をのばし、延べ三千人の孤児の為に自分の全てを投げ出しました。そして、子供達には腹いっぱい食べさせるという〝満腹主義〟や、個々の悩みは、自分と子供の二人だけで話し合い、子供の心を極力傷つけまいとする〝密室教育〟という〝個別教育〟も行い、当時としては、画期的な指導育成の方法を生み出しました。このような偉大な人物が、私たちの町に生まれたということをいろいろな人に知ってもらい、もっともっと誇りにしてよいと思います。

ところで、石井十次先生は〝孤児救済〟を自らの天職とされたのですが、果たして私たちはどんな天職を持つのでしょうか。私のこれからの人生に思いをめぐらすとき、こんな疑問が浮かび上がりました。人生というものは、いろいろな生き方があると思いますが、一番大切なことは、その人が精一杯自分の人生を生きるということだと思います。

現在、世界のあらゆる国々で「オゾン層破壊」「森林伐採」「酸性雨」などの問題が起きており、その解決策が様々に論じられています。人間一人一人の意識が低ければ、とうてい解決できるものではありません。

石井十次先生の「一人一人が本気になれば」という言葉が、今、問われているのではないでしょうか。

何かをしよう!助けよう!力になろう!そんな気持ちを持って、自分以外に他人の事も真剣に考え、思いやりを持った人が少しずつでも増えていくことが大切だと思います。そして、その手本となる石井十次先生の教えが、世界各地に広がってほしいと思います。私たち一人一人が本気になって、その教えを手本とし、いろいろな事に取り組んでいけば、この世の中はもっと住みよくなるのではないでしょうか。私はこの事をいつも頭にいれ、これからの人生を歩んでいくつもりです。最後にもう一度、石井十次先生のお言葉を言って終りに致します。

〝天地は一体なり　一人本気になれば
　おのずからその響き　世界に広がらん〟

ありがとうございました。

フラウェンコール
なでしこ
中尾絹子

■「石井十次」の歌によせて

〝村の祭りに縄の帯〟で始まる「石井十次」の歌を唄うようになったのは、合唱団結成の昭和五十四年頃だったろうか。当初は歌詞もうろ覚えだったが、今では団員のみんながいつでも何処でも唄える愛唱歌となった。

石井十次先生の偉業は、国内はもとより広く国外にも知られているところであるが、平成二年「財団法人 石井十次顕彰会」が発足されてからは、その趣旨に則って着々と実績をあげられている。

一昨年の「石井十次顕彰のつどい」では、セレモニーの一つとして「石井十次」の歌で参加させていただいた。町内の小、中、高校の生徒も意見発表などで十次先生を讃えた。特に西小学校の六年生全員の劇は、素朴な中にも真剣な表現に、宮城まり子さんをはじめ、見ている者に深い感動を与えた。

また平成四年六月には、高鍋ライオンズクラブによって、高鍋駅の東側に「孤児の父」の碑が改装され、その除幕式典では松林を背景に唄った感動が今も鮮やかに思い出される。

町内の公的施設や地区の公民館に掲げてある石井十次先生の肖像画は、私達に何かを語りかけ特に子育てには役立っているように思う。

保育園の玄関に掛けてある肖像画の前で、園児達がこんな会話をしていた。「あんた、こん人知っちょる」「いや」「こん人は、えれー人じゃが、親のいない子供達を助けた人よ」と得意気に話している。私は思いがけない園児達の会話に事務室から飛び出して行った。五歳児の子供達が四、五人肖像画を見上げていた。

「H君その話誰に聞いたの」「うん、テレビでも見たし、お母さんも話してくれたよ」と目を輝かして答えてくれた。私は思わず頭をなで「感心、えらいね」とほめた。

今や、幼い子供から小、中、高の生徒達の心にも石井十次先生の愛の心が浸透しつつある事を思うとうれしかった。

「天は父なり、人は同胞なれば互に相信じ相愛すべき事」など数多くの名言や業蹟を遺された石井十次先生の歌を唄い続ける事により、何等かの顕彰が出来るとすれば、私達にとってもこれ以上の幸せはない。

最後に、顕彰会関係の方々に心からの敬意をはらうと共に、顕彰会の益々のご発展をお祈りする次第である。